

葉山マリーナのプライ
ベートクルーザー船室
で出資打ち切りを告げ
た夜にファンドマネー
ジャーから波音だけが
響くベッドで朝まで暴
かれるカントボーイ起
業家

革手袋の指先が、襟元のボタンをひとつ、またひとつと外す。

「やめろ……っ、こんなの、契約じゃ……っ」

「契約だよ。サインすればすぐに止める」

シャンパングラスを片手に、男が微笑んだ。冷たい笑み。窓の外は漆黒の相模湾、月明かりだけが波頭で砕けている。葉山マリーナを出てから、もう何分経ったのかも分からない。エンジン音は止み、船はただ波に揺れる。

絹のシーツに沈められた背中が、ひどく冷たい。なのに、首筋だけが燃えるように熱い。

……どうして、こんなことに。

「君、汗かいてるよ」

男の指先が、頬を撫でた。革と煙草と、海塩の匂い。鼻孔の奥に、その匂いが棲みつく。

ふ、と鷹宮怜司が鼻を寄せた。襟足のあたりに、息がかかる。

「白檀の匂いがする。——薄い潮の匂いも、混ざってるな」

全身の血が、一瞬で冷えた。

知られた。

F2型だと、知られた。

慌てて内ポケットの抑制剤に手を伸ばす。けれど、その手首を革手袋越しの手があっさりと掴み、シーツに縫い付ける。

「もう遅い。投資先の体質くらい、調べないと思ってた?」

「っ……離せ……っ」

声が掠れた。喉の奥が、もう湿っている。

四ヶ月に一度の発情期。本日、初日。取締役会のあとに切らした抑制剤を、まだ補充できていない。たった一日のずれを、この男は嗅ぎ当てた。

いや——三ヶ月前から、知っていた。最初から。

「Argent Capitalからの出資、来期で打ち切りたい」

栈橋でそう告げた、ほんの一時間前の自分が、別人のように遠い。

その台詞のために、僕は呼ばれたのではなかった。出資打ち切りを告げる、その夜にこそ、この男は牙を剥くために、半年がかりで罫を張っていた。

マスタースイートのローテーブルに広げられた契約書が、視界の端で揺れる。Nereid株式譲渡契約書。額面は時価の三分の一。

「打ち切るなら、優先買取条項を発動する。三日以内にサインしろ」——そう告げたあと、男は革手袋を一度だけ、ぱちんと鳴らした。

その音で、僕は理解した。

逃げ道は、最初からない。

「ふ、あ……っ♡」

ボタンを外し終えた男の指が、鎖骨をなぞる。声が漏れた。
自分のものとは思えない、湿った声。

(嘘だろ、こんな……っ、鎖骨だけで……っ)

F2型の身体は、発情期の初日、たったそれだけの接触で芯から疼く。男としてのプライドが粉々になる音が、頭の奥で響いた。

慶應理工。AIヘルスケアスタートアップ。雑誌の若手起業家特集。

そういう肩書きは、今ここでは、なんの盾にもならない。

「胸の突起、もう硬くなってる」

革手袋の指先が、シャツ越しに乳首を弾いた。

「ひ……っ♡♡」

跳ねた腰を、男の太腿が押さえつける。

「やめ……っ、こんな、こんなこと……投資家のすることじゃ……っ」

「投資家だからやってる。担保を取らなければ、損失が出るだろう?」

「担保……?」

「君のカントだよ、詩くん。新しい担保だ」

淡々と、決算報告でも読むような声で、男が言った。

ベッドサイドの間接照明が、男の灰青の眼を青く照らす。
頬の右下に、小さな黒子。タキシードを着崩した襟元に、古いシグネットリングが鈍く光る。

冷淡な眼差し。なのに、視線の奥でだけ、何かがぎらついていた。

「やめろ……っ、頼む、頼むから……っ」

「頼む？」

くす、と男が笑う。

「君が頼むのか？ 慶應理工卒の、メディアに引っ張りだこの、若き天才CEOが？」

「っ……」

「いい顔だ。プレゼン会場では絶対に見せなかった顔」

ネクタイが、するりと抜かれた。三本の指が、ボクサーの上から、もう濡れている部分をなぞる。

「ひ、あ……っ♡ふあ……っ♡」

「ほら、もう濡れてる。三ヶ月、抑制剤切らさなかったのは大したものだ」

革手袋を外す音。素手の指が、薄い布の縁から滑り込む。
襷を割って、無造作に、二本。

「お、おっ……♡♡や、やめ……っ♡」

ぐちゅ、と濡れた音が、脚の間から響いた。

指二本で、こんな音が鳴る身体だなんて。普段なら抑制剤で殺してしまっている感覚が、今夜は何の蓋もなく、剥き出して晒される。

「中、もう絡みつくな。——可哀想に、三ヶ月、こんなに我慢してたのか」

「ちが……っ、我慢、なんて……っ♡♡」

してない、と言いたかった。発情期は処理するもの。誰かに埋めてもらうものじゃない。抑制剤と冷たいシャワーで凌ぐ。それが、僕の矜持だ。

なのに、男の指は、その矜持の薄皮を、一枚ずつ剥ぐ。

「あ、あ、あ……っ♡そこ、っ、やだ、やだ……っ♡」

「ここ？」

指の腹が、前壁の、たった一点を擦った。ぞわり、と腰骨の内側で何かが弾けて、視界が白く滲む。

「ひ、あああ……っ♡♡」

「いい反応だ。データ通りだな」

「データ……？」

男はもう片方の手で、Tシャツをめくり上げた。剥き出しになった乳首が、空気に触れただけで疼く。革手袋を外したばかりの、まだ皮の匂いが残る指が、その突起を捏ねる。

「君のクリニックのカルテ、見せてもらった。F2型、第二次成熟期、最終受診から三ヶ月。発情期予測日は——今夜から三日間」

「っ……っ、嘘だろ……っ」

「医療データの売買は違法だが、ヘッジファンドはそういう情報で動いてる」

頭の中が、真っ白になった。

栈橋に呼び出されたのも、エンジンが唸って沖合に運ばれたのも、契約書を広げられたのも、全部この瞬間のために、緻密に組まれた台本。

僕は、最初から、この男のベッドに辿り着くようにレールを敷かれていた。

「やだ、やだ、こんな……っ、こんなのって、ない……っ」

「あるよ。現にこうして、君は俺の指を咥えてる」

ぐぷ、と指が深く埋まる。同時に、男の親指が、もうひとつの突起——カントの上端の、小さな尖りを押した。

「び、い……っ♡♡」

「ここ、クリトリスっていう器官だ。知ってる？」

「あ、あ……っ、知っ、てる……っ♡」

「触られたことは？」

「な……っ、ない……っ♡♡」

答えてしまったから、唇を噛んだ。プライベートを差し出してしまった。けれど、男の指はもうそこを離さない。

「処女か。CEOのくせに」

「やめろ……っ、その、言い方……っ♡」

「事実だろ。投資家を口説き落とすために身体を売ったこともない、本物の処女CEOだ。——だから、価値がある」

価値。

その言葉が、耳の奥で反響した。

商談のテーブルで、何度も聞いた言葉。バリュエーション、リターン、エクイティ。数字でしか動かないこの男が、いま、僕の身体に「価値」を見出している。

屈辱で、目尻に熱が滲んだ。

（こんなのって、ない……っ。僕は、男だ。男なのに、こんな、女みたいに濡らして、こんな、声を出して……っ）

なのに、身体は、男の指を歓迎する。締めつける。奥から、また熱いものが溢れる。

F2型カントボーイ。男の骨格、男の声、男のプライドを持ちながら、腰の下にだけ女の器を抱えてしまった存在。普段は抑制剤と矜持で蓋をしているそれが、今夜だけは、剥き出して——男の指の前に、晒される。

「やだ……っ、やめてくれ、頼む……っ、契約は、ちゃんと、話し合いで……っ」

最後の力を振り絞って、僕は言った。

すると——男が、指を抜いた。

「分かった」

え。

信じられない顔で、男を見上げた。

鷹宮はベッドの縁に腰掛け、シャンパングラスを取り直す。
グラスの中で、薄氷が小さく鳴った。

「俺もやり過ぎた。詩くん、君が本当に嫌がるなら、無理にはしない」

声色が、変わっていた。

苦みのある、——優しさ。

「……は？」

「契約書は破ろう。出資打ち切りも、呑む」

男は、テーブルの上の譲渡契約書を、無造作に手に取った。
そして——目の前で、ゆっくりと、半分に裂いた。

紙が裂ける音が、船室に小さく響く。

「な……っ、なんで……」

「代わりに、三ヶ月、君を口説かせてくれ」

男はベッドサイドのドンペリ・ロゼを開け、自分のグラス
に注ぐ。薔薇色の泡が、薄い氷の上で踊った。

「一目見た時から、君を欲しいと思ってた。投資はその口実だ」

タキシードのシャツをはだけて、革手袋を脇に置く。剥き出しになった腕の内側に、古い火傷の痕が見えた。

「——若い頃の話だが、俺も這い上がってきた口でね。シンガポールに渡る前、廃油まみれの工場で働いてた。だから君を見てると、当時の自分が重なる」

灰青の眼が、僕を見下ろす。さっきまでの、捕食者の眼ではない。

憧憬。

その色が、男の目の奥にあった。

「君は綺麗だ。仕事の話じゃなくて、君個人の話がしたい」

……騙されてはいけない、と理性が叫ぶ。

けれど、身体の芯はもう疼いていて、頭は熱で痺れていて、そして、目の前のこの男の腕の傷痕は、本物に見えた。

(……勘違いしてた、のかな)

冷たいだけの男じゃ、なかったのかも。

ヘッジファンドのマネージングディレクター。資産運用残高八千二百億。タキシードとシグネットリング。そういう装飾の奥に、火傷の痕を抱えた男がいる。

「——勘違い、して、た、のかな」

唇から、勝手にそんな言葉が漏れた。

「いや、俺が悪い。やり方を間違えた」

男はシャンパンを口に含み、僕の上に屈み込んだ。

唇が、重なる。冷たい泡が、舌の上で弾けて、薔薇色の味が、口の奥に広がる。

「ん……っ、ふ……あ」

「君が嫌ならここで止める」

唇を離した男が、額をくっつけたまま、囁いた。

ここで止めて、と言え、止めてくれる。

その確信が、僕の喉を塞いだ。

言えなかった。

発情期の身体が、誰でもいいから埋めて欲しいと、骨の髄から囁く。誰でもいい——なら、せめて、火傷の痕を抱えたこの男が、いい。

「……止めなくて、いい」

言ってしまった。

自分の声の細さに、耳が熱くなる。

「いい子だ」

男が微笑んで、うなじに舌を這わせる。

「ここに、痕、つけていい？」

「……っ、ん」

答えと同時に、柔らかく噛まれた。

歯型が、淡く、皮膚に沈む。痛みはほとんどない。ただ、印を押されたのだという感覚だけが、骨に残る。

その印が、自分の身体の上にあると思うだけで、内股がじわりと濡れた。

男が、ゆっくりとボクサーを引きずり下ろす。

白いシートの上に、剥き出しのカント。襷は薄く開き、もう奥から零れたものが、内腿に細い筋を引いている。

男はそれを見て、息を呑む。それから、革手袋ではなく、素手で——指の腹で、襷を撫でた。

「あ……っ、ふあっ♡」

「綺麗だ。CEOの顔とは、別の生き物みたいだ」

「言、わな……っ、いで……♡」

「言わせろよ。三ヶ月、これを思って眠った」

タキシードのスラックスを寛げる音。低く、唸るような吐息。

男が、僕の脚を持ち上げ、自分の腰を寄せた。

あてがわれたものは、想像していたよりずっと熱くて、ずっと大きかった。

「あ……っ、まって、それ、はい、らな……っ♡」

「入る。F2型は、ちゃんとそういう設計だ」

「設計、って……っ、ひ、あああっ♡♡」

ぬぷ、と先端が、奥へ滑り込む。

痛みは、なかった。

ただ、内側のすべての髪が、外から押し広げられて、男のかたちを、ひとつずつ覚える。

「ふ、あ……っ♡ ふか、い……っ♡」

「君の中、熱いな」

男の額に、汗が浮く。

灰青の眼が、上から見下ろす。タキシードのシャツのボタンが半分外れて、首筋に汗が伝う。さっきまでの冷淡な仮面が、今はわずかに崩れていた。

——本物に、見えた。

「詩、詩……」

男が、何度も僕の名を呼んだ。

ゆっくりと、丁寧に、腰を動かす。奥を挟めるのではなく、内側の地図を作るような腰使い。

お腹の中の、ずっと触れられたことのない箇所が、ひとつ、またひとつと、男の熱で熾された。

「あ、っ♡ あ、れいじ、さん、ふか……っ♡」

「呼べるんだ、もう」

「だっ、て……っ、いま、優しい、から……っ♡」

言ってしまうと、自分で耳まで熱くなる。

優しい、なんて、僕の語彙には普段ない。

(だめだ……男なのに、こんな、こんな声で、こんなことを言ってしまう)

心が、まだ抵抗している。男としての矜持が、しがみついている。けれど、身体は——男の熱を全部覚えて、奥に引き込もうとする。

心と身体、引き裂かれる音が、頭の奥で聞こえる。

それが、F2型のカントボーイの呪い。

いつもは抑制剤で蓋をしていた呪いが、今夜は、男に名前を呼ばれるたびに、甘い祝福に塗り替わる。

「い、く……っ♡♡ れいじ、さん、いく、いく——っ♡♡♡」

奥が、ぎゅ、と締まった。

男も、低く呻いて、最奥に、静かに精を吐いた。

とぷ、と熱が広がる。

お腹の奥が、男の体温で満たされる感覚に、涙を流した。屈辱の涙ではなかった。——少なくとも、その瞬間は。

「……はぁ、っ、はぁ……」

「上手にイけたな」

男が、頭を撫でた。汗ばんだ前髪を、丁寧に分けて。

「これで、君の中に俺の匂いが入った」

窓の向こうで、波が低く揺れる。

月が、少し傾いていた。

男の腕の中で、僕は、救われたような気がしてしまった。

乗っ取られかけて、強引に脱がされて、けれど、最後には、本物の優しさで埋められた。

ヘッジファンドの男にも、内側があった。

火傷の痕があった。

それが、嘘ではない、と——僕は信じてしまった。

信じて、しまった。

「……少し、寝てもいい?」

「いいよ。朝になったらマリーナへ戻そう」

男のシャツの匂いに頬を寄せて、目を閉じる。

革と煙草と、海塩。

その匂いが、もう僕の脳の奥に巣を作っているなんて、知らないまま——僕は、初めて他人の腕の中で、深く眠りに落ちた。

＊

——ぴこん。

通知音。

薄目を開けたのは、その電子音のせい。

明け方近く、船室の照明は最小限に落とされていて、波の音だけが低く響く。

男はベッドの脇に立っている。コンソールの上のラップトップを覗き込み、片手でシャンパングラスを揺らしていた。

灰青の眼が、画面の白い光に照らされる。

その口角が、ゆっくりと、上がった。

「予定通り、株式の議決権、過半数押さえた」